ルーン文字の由来

河崎　靖

1.

かつて民族大移動期に、1王国を築いていた西ゴート人が残した、まとまった文献がゲルマン語の最古のテキストである[1]。すなわち、4世紀に『聖書』を翻訳した西ゴート人ウルフィラ（Wulfila；アリウス派の司教、311年‐382年）によるテキストであり、次に挙げる「主の祈り（Paternoster, 独 Vaterunser）」（マタイ 6, 9‐13）は、6世紀に転写された写本「銀文字聖書 „Codex argenteus“」を1行ずつ忠実に再現したものである[2]。このテキストは紫色の羊皮紙の上に銀色のインクで書かれており[3]、当時ラヴェンナに居住していた東ゴート人のテオドリクス王のもとで仕上げられたという。

Atta unsar þu in himinam:

天にましますわれらが父（神）よ

weihnai namo þein. Qimai thiudi [–]

あなたのお名前が聖なるものとなりますように　あなたの王国が

nassus þeins. Wairþai wilja

やってきますように　あなたの御意志が

þeins, swe in himina jah ana

天においてと同じようにこの地においても実現されますように

airþai. Hlaif unsarana þana sin [–]

われわれの毎日のパンを今日も

teinan gif uns himma daga. Jah

われわれにお与え下さい　そして

aflet uns þatei skulans sijai [–]

われわれが犯すであろう罪をお許し下さい

ma, swaswe jah weis afletam þai~

われわれもまたわれわれの中の罪深きものを

skulam unsaraim. Jah ni brig [–]

許すように　われわれを誘惑の手に

gais uns in fraistubnjai, ak lau[–]

さらされないで下さい　その代わりにわれわれを

sei uns af þamma ubilin. Unte

悪しきものからお救い下さい　なぜなら

þeina ist þiudangardi jah mahts

あなたの王国は全能で

jah wulþus in aiwins. Amen.

栄光のあるものですから　アーメン

西ゴート人の僧侶ウルフィラが『聖書』翻訳のために用いた文字は、実は、ギリシア語（と部分的にルーン文字）をもとにして生み出されたアルファベットであった。このルーン文字には何かしら呪術的な秘密のニュアンスが内包されているように感じられ、この文字で書かれたテキストは古代ゲルマンの息吹を感じさせるものである。ただ、基本的に呪文を記した断片的な形でしか今日の私たちには伝わっていない[4]。

２.

通常、ゲルマン人側から見ると南方系の影響を受けたとされるルーン文字の素性に関しては、次の引用が示す通り、詳しいことはあまりわかっていない[5]。

„Die ganaue Herkunft der Runenschrift ist noch immer stark umstritten.“ (Krause 2000:34)

レティア人 Räter, イリュリア人 Illyrer, ヴェネト人 Veneter 等のアルプス地方の諸民族から伝播したともされるルーン文字ではある。ともかく、基本的に祭祀のための独自の文字体系として発達した。この文字体系は古形では 24 個（新しい時代である、初期のノルド語およびアングロ・サクソン語の変異体では 16 または 26 ないし 33 個）の表音文字から成り立っており、いわゆるローマン・アルファベットの ABC をまねて、最初の６文字をとって「フサルク」futhark と呼ばれている。

24 個のルーン文字で石碑や武器や護符に記された最古の記録は大部分、大変、短い。時代としてはゲルマン民族内部ですでに分岐していた時期に入ってからのものであることは確かである[6]。最も古いルーン文字は「ネガウの兜 Helm von Negau」に書かれたもので[7]、西暦紀元の始まりの頃（もしくはそれ以前）と推定されている[8]。その語句とは、

HARIGASTITEIWA

という表記であり、

「神（teiwa）なるハリガスト（Harigast）[9] に」

を意味していると解釈される。もう１つ、有名な別のルーン文字テキストは「ガレフスの黄金の角杯 Goldghorn von Gallehus」（デンマークの南部，紀元後 400 年頃）に書かれたものである。

EKHLEWAGASTIZ: HOLTIJAZ: HORNA: TAWIDO
「我，ホルティング（Holt の息子）であるフレワガスト Hlewagast がこの角杯を作れり」

さらに、７世紀の初め、すなわちすでにアレマン族の初期の時代のものとなるが [10]、ビューラハ Bülach（チューリヒ Zürich）の女性の墓から発見された円形の留めピン [11] Scheibenfibel に書かれた「愛の碑文」Libesinschrift はとりわけルーン文字に特有の暗号的な機能を例証するものである [12]。

FRIFRIDIL
„Friedel“「フリーデル」

DU[13]
„du“「おまえは」

F[A]T[O] MIK L

„fasse mich“「私をつかめ」[14]

L　　L

２個のルーン文字Ｌ（左方向書き）[16]

このようにルーン文字は何か怪しげな魔力を宿すものとみなされている。そもそも、もともとルーンという名称そのものが言わば言霊（ことだま）のごときものを指し示したものである。実際、ルーン文字が彫られている石碑には、龍や騎士の姿のような神話的図像を伴うものが多く、このルーン文字は古代ゲルマンの神話的世界へと私たちを誘う[17]。ルーン文字は地理的には、主としてスカンジナヴィア半島やブリテン島など北西ヨーロッパで用いられているが[18]、紀元後３世紀頃から 17 世紀にかけて飾り物や記念碑などに使われ続け、現在、約 4000 の碑文と若干の写本が残されている。

３.

さて、では一体このルーン文字はそもそもどこから来たのであろうか。どの文字体系と類縁性をもつのであろうか。この点、先述のように、実はそれほどはっきりわかっているわけではない。

„Die Reihenfolge der Runen im älteren Fuþark gilt als eins der ungelösten Probleme, die sich mit diesem Schreibsystem verbinden.“ (Vennemann 2009:857)

一般的には、ローマのアルファベットに由来すると考えられている[19]。と言うのも、ライン川流域でゲルマン人が紀元後数百年の間にローマ人と交易を重ねていたから[20]、というのが通説である[21]。Düwel（[3]2001）も次のように述べ、こうした考え方を支持している[22]：„Die Runenschrift wurde auf der Grundlage eines mediterranen Alphabets, am ehesten des lateinischen, in der Zeit um Christi Geburt bis ins 1. Jahrhundert n.Chr. hinein im westlichen Ostseeraum.“ さらにローマのアルファベットのその元を辿れば、古代イタリアのエトルリア文字に遡ることになる。紀元前７世紀の頃に栄えていたエトルリア（紀元前３世紀にローマに制圧される）は、アルプスを越えて来襲したキンブリー族などゲルマン系の民族との接触もあったであろう。これら北方のゲルマン人にエトルリア人から直接、文字が伝わった可能性は十分あり得ることである[23]。

ところで一方、ルーン文字の出自に関する新しい学説として、この文字の伝播は陸路経由ではなく、むしろ海路によるものと考えられないであろうかという説が提唱されている。アメリカのルーン学者で、*A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions* の著者でもあるアントンセン（E.H.Antonsen）も次のように述べ、書記が海路を経て北ヨーロッパに伝わった可能性を示唆している。

> “It is well within the realm of possibilities that the knowledge of writing was brought to the North by sea rather than through the entire continent.” (Antonsen 2002:116)

同じく海路による文字伝播を想定する考え方をとりながらも、アントンセンのようにギリシア文字の伝播を考えるのではなく、フェニキア文字が海路で北ヨーロッパに伝わったのではないかという考えの研究者もいる（Vennemann 2006・2009）[24]。ここでは、フェニキア文字の起こりからはじめて、その文字

体系の拡がっていく範囲を文字の文化圏と捉えることにより、文字体系の伝播のありようについて考察を巡らしたい。

もともとフェニキア人とは西セム系のカナン人のことである[25]。この人びとのことば、カナン語は、セム語派（例：ヘブライ語）で初めてアルファベットを用い、その文字体系を他のセム語派へと伝播したという歴史をもつ[26]。カナンと言えば、地中海とヨルダン川・死海に挟まれた地域一帯を指し、『聖書』では「乳と蜜の流れる場所」と描写され、『聖書』の神がアブラハムの子孫に与えると語った「約束の土地」である。本来フェニキア人は、このパレスチナ地方に住んでいたのであるが、ヘブライ人がパレスチナに侵入し定住するにしたがって、徐々に北方に住地を移した。その新しい地域に先住のヤペテ人（オリエント系）やアーリア系種族（紀元前 18~17 世紀の民族移動によって来住）との融合によって、今日的な意味でのフェニキア人の原型が誕生したと考えられる。紀元前 11 世紀頃からフェニキア人の植民・貿易活動によって、フェニキア文字[27]はいよいよ地中海周辺に広まっていくことになる[28]。紀元前 3 世紀には[29]、北アフリカのカルタゴ（現在のチュニジア）を中心にフェニキア人は最

盛期を迎える[30]。

カルタゴ（Karthago）という名称はフェニキア語の Kart Hadasht「新しい町」に由来する[31]。フェニキア人は強力な海軍力をもち、海岸線に沿って多くの植民都市・交易拠点を造っていった。そのため、シチリア島の領有等を巡ってギリシアとは常に対立関係にあったが、それでも版図を拡大するための遠征を続け、ハンニバル・マーゴの頃には、モロッコからセネガル、大西洋にまで及んでいた。カルタゴが地中海域の商業の中心であるのは、ローマによる征服（ポエニ戦争）まで続く。地中海ではサルディニア島・マルタ島・バレアレス諸島を支配し、イベリア半島（スペイン南部）に植民都市を建設していった。

カルタゴ遺跡（ローマ皇帝アントニヌス・ピウスによるもの）

4.

ルーン文字の誕生（考古学の記録では紀元後３世紀に初めて登場）の背景にフェニキア文字を想定する第一の根拠は何より、文字の配列による。ルーン文字の配列はギリシア語やラテン語のアルファベットの文字配列とは合致しない[32]。ルーン文字の体系が歴史的にどのように発達したのか、その過程を辿ればおよそ次のようなプロセスが想定されよう[33]。

f b u d e w z h j k l m n ñ p r s t

このような祖フサルク（Ur-Fuþark）の段階から徐々に、今日に伝わる形でのフサルク（Fuþark）が形作られていった。まず e（長音）が a（長音）となり、b の移動（２番目の位置から末尾へ）が加わり文字体系の変化が始まる。

F ï ê È W ú H J K l M n Á P u S t b

f u d a w z h j k l m n ñ p r s t b

r 音化（Rhotazismus）が起こった後、z の位置に r が入り、i が j に並置される。末尾に e が加わり次のような体系になる。

F ï ê È u W H I J K l M n Á P ú S t b E

f u d a r w h I j k l m n ñ p R s t b e

k が w の前に、あるいは n が i の前に置かれたり、また、半母音 l, m, n の順序が崩れ l, m が後ろの方に移動したりする。

F ï ê È u K W H n I J P ú S t b E M l Á

f u d a r k w h n I j p R s t b e m l ñ

d が加わり、それまで /d/ も /θ/ も表わしていた þ が /θ/ だけを表わすようになる。さらに o が最後に加わる。

F u ê È r K W H n I J P ú S t b E M l Á D O

f u þ a r k w h n I j p R s t b e m l ñ d o

このように、音変化・置き換え・添加などの段階を経て、今日伝わるフサルク（Fuþark）に近づいてくる。

F u ê È r K G W H n I J ¨ P ú S t b E M l Á D O

f u þ a r k g w h n i j ï p R s t b e m l ñ d o

ここで提案された説は、従来の学説とは大きく異なり、新たに、フェニキア文字が海路により北ヨーロッパまで伝わったのではないかという文字伝播のルートの可能性を想定する考え方である。基本的に、文字配列の変遷を軸として、音変化などゲルマン語に起こり得る諸段階をたて、フサルク（Fuþark）の発展プロセスを説明している。これにより、フサルク（Fuþark）の成立に関して、これまで考えられてきたようにラテン語やギリシア語のアルファベットに由来するとみなすよりは、むしろ、その誕生の背景にフェニキア文字を想定するのがフサルク（Fuþark）の全貌を解明するのに筋の通った説明となることがわかる。先史の古ルーン文字がどこか他文化圏のアルファベットを援用したとするのであれば、そこに関わったのがフェニキア文字のアルファベットであるとみなす方が根拠付けしやすい。確かに、祖フサルク（Ur-Fuþark）の再建等の課題が残されてはいるが、このような新しい見方をすることによって明らかになる事例は少なくない。

＜参考文献＞

Antonsen, E. H. 2002. Runes and Germanic linguistics (Trends in Linguistics: Studies and Monographs, 140). Berlin.

Arntz, H. 1944. Handbuch der Runenkunde (Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte B: Ergänzungsreihe, 3). 2. Aufl. Halle/Saale.

Bang, Jørgen Chr. 1997. Runes: Genealogy and grammatology: An augmented version of the original Danish essay *Runernes genealogi og grammatologi* which was presented at Aarhus University 10 October 1996. Odense.

Beck, H. 2003. Zum Problem der 13. Rune (¨), in: W. Heizmann / A. van Nahl (Hgg.), Runica – Germanica – Mediaevalia (Ergänzungsbände zum Reallexikon der Germanischen Altertumskunde 37). Berlin/New York, S. 77–83.

Brekle, H. 1994. Die Antiqualinie von ca. –1500 bis ca. +1500: Untersuchungen zur Morphogenese des westlichen Alphabets auf kognitivistischer Basis. Münster.

Campbell, A. 1959. Old English Grammar. Oxford (Nachdruck 1969).

コムリー 他 編（1999）:『世界言語文化図鑑』東洋書林

クリスタル（1992）:『言語学百科事典』大修館書店

Düwel, K. 2008. Runenkunde (Sammlung Metzler 72). 4. Aufl. Stuttgart.

Düwel, K./Wilhelm H. 2006. Das ältere Fuþark: Überlieferung und Wirkungsmöglichkeiten der Runen, in: A. Bammesberger / G. Waxenberger (Hgg.), Das Fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen: Akten der Tagung in Eichstätt vom 20. bis 24. Juli 2003 (Ergänzungsbände zum Reallexikon der Germanischen Altertumskunde 51). Berlin/New York, S. 3–60.

Griffiths, A. 1999. The fuþark (and ogam): Order as a key to origin, in: Indogermanische Forschungen 104, S. 164–210.

Grønvik, O. 2001. Über die Bildung des älteren und des jüngeren Runenalphabets (Osloer Beiträge zur Germanistik 29). Frankfurt am Main.

Gutenbrunner, S. 1951. Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen: Zugleich eine Einführung in das Urnordische (Sprachwissenschaftliche Studienbücher). Heidelberg.

Heizmann, W. (Ms). Zur Entstehung der Runenschrift. Vortrag, Symposium on Research in Older Runes, Oslo, 3.–4. September 2004.

Hempl, G. 1898. The origin of the runes, in: Journal of English and Germanic Philology 2, S.

370–374.

Jensen, H. 1925. Geschichte der Schrift: Mit 303 Abbildungen. Hannover.

Klingenberg, H. 1976. Runenfibel von Bülach, Kanton Zürich. Liebesinschrift aus alemannischer Frühzeit, in: Alemannica. Landeskundliche Beiträge. Festschrift für B. Boesch. Bühl/Baden, S.308ff.

Knirk, J. 2002. Runes: Origin, development of the futhark, functions, applications, and methodological considerations, in: O. Bandle et al. (Hgg.), The Nordic Languages: An International Handbook of the History of the North Germanic Languages, 2 Bde. Berlin, Bd. 1, S. 634–648.

Krause, W. 1970. Runen (Sammlung Göschen 1244/1244a). Berlin.

Krüger, B. et al. 1978. Die Germanen. Band 1. 2. Aufl. Berlin.

Looijenga, J. H. 1997. Runes around the North Sea and on the Continent AD 150–700: Texts & contexts (Diss. Universität Groningen). Groningen.

Miller, D. G. 1994. Ancient scripts and phonological knowledge (Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science, Series IV: Current Issues in Linguistic Theory 116). Amsterdam.

Morris, R. L. 1988. Runic and Mediterranean epigraphy (North-Western European Language Evolution, Supplement 4). Odense.

小塩 節（2008）：『銀文字聖書の謎』新潮社

ページ , R.（1996）：『ルーン文字』（菅原邦城 訳）学芸書林

坂本百大 他 編（2002）：『記号学大事典』柏書房

シュミット , W. 他（2004）：『総論 ドイツ語の歴史』（西本美彦 他 訳）朝日出版社

Seebold, E. 1986. Was haben die Germanen mit den Runen gemacht? Und wieviel haben sie davon von ihren antiken Vorbildern gelernt? In: B. Brogyanyi / Th. Krömmelbein (Hgg.), Germanic dialects: Linguistic and philological investigations (Current Issues in Linguistic Theory 38). Amsterdam, S. 525–583.

Seebold, E. 1993. Fuþark, Beith-Luis-Nion, He-Lameth, Abgad und Alphabet: Über die Systematik der Zeichenaufzählung bei Buchstabenschriften, in: F. Heidermanns / H. Rix / E. Seebold (Hgg.), Sprachen und Schriften des antiken Mittelmeerraums: Festschrift für Jürgen Untermann zum 65. Geburtstag (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft 78). Innsbruck, S. 411–444.

Seim, K. F. 2007. Runologie, in: O. E. Haugen (Hg.), Altnordische Philologie: Norwegen und Island (aus dem Norwegischen von Astrid van Nahl). Berlin, S. 147–222. [Norwegische Origi-

nalausgabe: Handbok i norrøn filologi, Bergen 2004.]
世界の文字研究会（1995）：『世界の文字の図典』吉川弘文館
Spurkland, T. 2005. Norwegian runes and runic inscriptions, translated by B. van der Hoek. Woodbridge, Suffolk. [Norwegische Originalausgabe: I begynnelsen var fuþark, Oslo 2001.]
Vennemann, Th. 1994. Zur Entwicklung der reduplizierenden Verben im Germanischen, in: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 116, S. 167–221.
Vennemann, Th. 2003. Europa Vasconica – Europa Semitica (Trends in Linguistics: Studies and Monographs 138). (Hg.) P. N. A. Hanna. Berlin.
Vennemann, Th. 2004. *Phol, Balder*, and the birth of Germanic, in: I. Hyvärinen /P. Kallio / J. Korhonen (Hgg.), Etymologie, Entlehnungen und Entwicklungen: Festschrift für Jorma Koivulehto zum 70. Geburtstag. Helsinki, S.439–457.
Vennemann, Th. 2005. Glauben wir noch an die Lautgesetze? Zur Etymologie von *Phol* und *Balder* im Zweiten Merseburger Zauberspruch, in: G. Meiser / O. Hackstein (Hgg.), Sprachkontakt und Sprachwandel: Akten der XI. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, 17.–23. September 2000, Halle an der Saale. Wiesbaden, S.709–733.
Vennemann, Th. 2006. Grimm's Law and Loanwords Transactions of the Philological Society 104-2, S.129-166.
Vennemann, Th. 2009. Zur Reihung der Runen im älteren Fuþark Analecta Septentrionalia (RGA-E-Band) 65, S.832-861.
Wimmer, L. F. A. 1887. Die Runenschrift (Rev. Ausgabe, aus dem Dänischen übersetzt von Dr. F. Holthausen). Berlin.

註

1 ルーン文字を使った断片は、これ以前の時期においても見出される。
2 ゴート語の発音について：(h または r の前の) aí は [ϵ] と発音する；（h または r の前の）aú は [ɔ] と発音する；ei は [i:]；gg は [ŋ] と発音する；h は語中音と語末音および hl–，hn–，hr– という頭音としての結合では [χ] と発音する；それ以外の場合は（今日のドイツ語の h のように）有気音である；q = qu；s は無声で発音される；þ は英語の th と発音する。
3 スウェーデンのウプサラ大学図書館所蔵。

4 Düwel ([4]2008) を参照のこと。

5 Krause (1970:36) : „Nachdem bereits K. Weinhold in seinem klassischen Buch „Altnordisches Leben“ (1856) an die Herkunft der Runen aus einem etruskischen Alphabet, wenn auch ohne jede nähere Begründung, gadacht hatte, versuchte der norwegische Sprachwissenschaftler und Keltologe Carl J. Marstrander (1928) den Nachweis zu führen, daß die Runen von einem nordetruskischen Alphabet abstammten, das seinerseits aus einem altgriechischen Alphabet entwickelt war. Die verschiedenen Gruppen dieser nordetruskischen Alphabete finden sich in Inschriften aus dem südwestlichen, südlichen und östlichen Alpenvorland aus der Zeit etwa vom 5. Jh. v. Chr. bis in den Anfang des 1. Jh.s n. Chr. Völker verschiedener Sprachen bedienten sich dieses Alphabetes: Kelten, Etrusker und Germanen.“

6 シュミット（2004:89）。それにも拘わらず、ルーン文字によるテキストは依然としてなお古語を含んでいて、より古い共通ゲルマン語 Gemeingermanisch の状態を照らし出すのではないかと考えることができる。

7 ウンターシュタイアーマルク Unterschteiermark, 今日のスロヴェニアの Negau で発見された。

8 Krüger（1978）:「この文字はゴート語と異なっているため、狭い意味での共通ゲルマン語とは見なされない」が、「すべての北ゲルマン語および西ゲルマン語の方言が自然のまま残った祖語形 natürliche Ursprache であるとみなすことができる」。

9 Wotan「ヴォータン」のことと考えられる（シュミット 2004:89）。

10 摩擦音は初期のルーン文字にはなく、T と K の文字は，７世紀のアレマン語ではすでに摩擦音の ss と ch を表わしている。

11 鹿の骨の白斑製の留めピン。

12 碑文の詳しい解釈は Klingenberg（1976）を参照。

13 ルーン文字 Þ（ソーン thorn）の代わりに１行目 fridilt・２行目 du で、文字 d を使用していることは注目に値する。

14 暗号化したルーン文字 L が付けられている。

15 ルーン文字の呪術 Runenmagie によればルーン文字 L は LAUKAZ「ネギ Lauch」を意味している（これは「多産」・「魔法の催淫薬（媚薬）のシンボルである）。

16 「ネギ Lauch」または「男根（G）lied」を意味している。

17 ページ（1996:5）

18 コムリー（1999:190-191）:「西ゴート族のウルフィラが紀元４世紀に聖書を翻訳した際、独自のアルファベットを作り出した。ギリシア語のアルファベットとラテン語のアルファベットに基礎をおきながら、u と o の２文字は例外でルーン文字から由来している」。ルーン文字はキリスト教徒にとっては、異教徒が呪文として用いていた記号であるから、本来的には聖書翻訳の文字としては使いたくなかったであろうが、ゲルマン系の音の正確な表記のためにこのルーン文字にやや似たものを使わざるを得なかったのである（小塩 2008:17）。

19 コムリー（1999:190-191）:「フサルクの発達に力を与えたのは、おそらくラテン・アルファベットであったと思われる。

20 谷口（1971:125）:「1700 年頃のルーネ［…］は、Fuþark の順序も失われ無残なほどラテン文字の攻撃にされされ、昔日の Fuþark の面影はない」とし、文字体系として「ラテン文字がすっかりルーン文字と同居した感がする」と述べている（広島大学文学部紀要）。

21 クリスタル（1992:288）

22 Düwel, K. ([4]2008)

23 小塩（2008:17）

24 Vennemann (2009:857) : „Die Grundthese, daß das Ur-Fuþark nichts anderes war als das phönizische Alphabet (in seiner karthagischen Ausprägung) scheint mir bewiesen.“

25 フェニキアという名称はギリシア人によるものである。

26 非常に古いフェニキア語は、聖書のヘブライ語と同じように、子音だけを記していた。それを学んだギリシア語は母音も書くようになり、しかも右から左へ書いていたのを、左から右へと書くようになった（小塩 2008:26）。

27 象形文字から発達して、単純な線上の文字への進化していった。

28 『世界の文字の図典』（78-79 頁）

29 紀元前 3-2 世紀のポエニ戦争でローマに敗れた。

30 本土のフェニキア語は紀元前２世紀末までには死滅し、代わってアラム語がこのパレスチナ北方の地方で用いられるようになった。

31 ローマの詩人ウェルギリウスの「アエネイス」によると、テュロスの女王ディードーが兄ピュグマリオーンから逃れてカルタゴを建設したとされる。

32 Duwel ([4]2008:7) : „Die im großen und ganzen festliegende Reihenfolge der Zeichen entspricht nicht der aus dem Grieschischen und Lateinischen bekannten Alphabetfolge.“

33 コムリー（1999:190-191）:「最も初期のルーン文字の記号体系は 24 文字で構成

され、f-u-th-a-r-k（フサルク）と呼ばれるアルファベット順に並べられており、その文字記号の特徴は垂直な線と斜めの線である」。

34 これに関し然るべき理由付けがしかねる (Vennemann 2009:857)。